

万花地獄

女 米 也



吉川英治全集

第3卷

編纂委員

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

著作権者の了解
により検印廃止

吉川英治全集・3 万花地獄 女来也

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式 講談社

東京都文京区音羽二二二(大代表) 郵便番号一一二
電話東京九四五局二二二(大代表)
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 大進堂
本文用紙 日本バルブ工業株式会社特選

第一刷 昭和四十三年七月二十日

第二刷 昭和四十六年四月十日

定価 七百八十円

© 一九六八年 吉川文子

万
花
地
獄

砥ぎの頼み人

旅芸人や乙鳥の訪れと一緒に、甲州盆地の町にも遅い春が流れ込んで来た。

駒木大内記の知行所、御代崎一万石の陣屋の山を繞って、静かに古びた町が鍵の手に並んでいる。町は笛吹川の東に沿い、笹子峠の根に囲まれて、平和な盛光を抱いていた。

カタン、カタン、と甲斐絹を織る篋の音が懐く聞こえる町端れ——、武道具屋や薬種屋や、陣屋の若侍が通う茶屋小屋などの軒なみに挟まって、只一軒、厳めしい塗籠め作りの店が目立つ。

漆文字の光る、厚板の看板を仰ぐと、「御刀研師」と被せてその下には「甲府御番城御用、定八」としてあった。

店の隅を板場に仕切って、清浄な注連縄、周りをズラリと刀掛けにして、砥石水桶などを置き、中に悠たりと坐ったのがその研定。

小鬘に霜のみえる年頃だが、仕事には熱く、今も仕上砥に向って、無反細身な二尺四五寸の業刀を砥ぎぬいていたが、ふと

店頭へ女の影が射したので、手を止めると一緒に、気難かしそうな眼をジロリと上げた。

『気が散って不可ないな……』 膠もなく顎をしゃくって、

『用が無いなら通っておくれ、殊に女が見る物じゃない』と手を拭いた定八、煙草盆をよせて、スパーッと一服くゆらし乍ら、取っても付けぬような苦虫を噛みつぶしている。

『思わずお邪魔をいたしました……』

先刻から、店頭を足を止めていた女は、こう優しく詫びて、心持ち編笠の縁を下げた。

葉隠れに咲いた夕顔の花を思わせる白い頸に、笠の紅紐がギリッと結ばれていた。面貌は窈窕な襟足から肩の線までが細そりした鳥追姿。唐棧の袷へ小柳の帯を千鳥に結び、浅黄手甲をかけた艶な手に三味線を抱えていた。

尚、去りがてに佇立んでいた鳥追は、腹の立てぬような媚嬌を含んで、声低く、

『大層、お見事に研ぎ上げるようでございますが、もしやその無反の刀は、京の水田国重ではございませぬか』と問いかけてくる。

『ほう？……』 研定は吃驚した面持。

『そこから眺めただけで、此の直刃を水田の郷国重とは何うしてお分りなすった？』

『先程、水を切って肌をお透かしなされた時に、小切尖の形と刃の姿が、何うも其れではないかと存じまして』

『なる程、その特徴を見た所、大分心得が有らっしゃる』

『いえ、心得などのある訳ではいませぬが、実はその国重には、ちと見覚えがあるのでいいます。誰方様からお頼みで研ぎに参っている品か、お差聞えなければ、どうぞ教えて戴きとう存じます』

『そりゃ不可ない』煙管を振って頑固なに拒んだ。

『刀は武士の魂。言わずもがな私の商売は、人の魂を預っていますのじゃ。見知りのない者達へ減多なお喋舌りは出来ません。』

『御尤もなお言葉……では何日頃その持主が、お受取りに見えましようか。』

『左様——この十三日迄のお約束。もう合せ紙も済んだし、後は鍋へ磨きを入れて拭いをつける許りに成って居ります故、まづ無駄足はおかけせぬ心算。』

『諄いことを伺いまして、飛んだお邪げを致しました』と、笠の辞儀をした鳥追は、白桔梗に似た襟足をチラと見せて立ち去った。

『門附の女太夫にしては、風の変った女じゃないか……』と定八は後ろ姿へ呟いた言葉を、恰度茶を入れに來た娘のお吟に振り向けて、煙管の火皿に無心な拇指を動かしている。

『可哀そうじゃありませんか——』お吟は茶を汲んで父の前へ出しながら『きつとあの女太夫は、その刀に深い記憶があって、持主に会いたいののでございましょう……教えてお上げなされば好いのに、ほんとにお父様は意地悪な』

『馬鹿なことを言いなさい。ほかば太陽気が良くなるに連れて、旅芸人だの旅商人だの、種んな渡り鳥が入って来る。油断も隙もなりはしない。』

『ですけれど、あの水田郷の刀の研ぎを頼んで行ったお方も、慥か旅の者ではございませんか。』

『理窟を言うな』研定は苦笑した。そして美しい愛娘の咎め立てに、他愛もなく相手になるのを欣ぶ風。『——そりゃ矢張り旅の者さ、だが、頼まれたお方には仔細がない。』

『そう仰有ればあの門附だって、決して怪しいお人ではござい

ません。』

『お前、大層肩を持つが、そんな立派な口をきいて、あの鳥追の身元でも知っているのか。』

『それは存じませんけれど。』

『見たことか！ はははは。』

『じゃお話し申します。そんなにお父様が仰有るなら！』

『ふむ……』研定は、改まったお吟の様子に少し眼を瞠って、

『話すと言うと？』

『お父様……』声を低めて、お吟は艶やかに固唾を嚥む。

『私も実はあの女太夫を、不思議な人だと思っていた所なのでございます。』

ヒラヒラと店の中へ紛れてきた白い小蝶、研桶に渡してある直刃の切ッ尖へ止まりかけたが、光りに射られたかの如くツウと外へ舞って行った。

陣屋の山に射す影

『その晩は月は、怖しいほど皎々として居りました。まだ寒の明けない頃でしたから、お陣屋の山も真っ白で、木は氷柱を植えたよう。その代り提灯なしでも、道は昼のように登れました。』

蝶の行方を頼め乍ら、お吟は恍惚と話すのである。研定は茶を話として聞いている。寛々たる仕事休みだ。暗い家の中から明るい往来を眺めていると、馬の鈴や物売りの女やお陣屋の侍が長閑に時々通り過ぎて行く。

（俺もほんとは倅せなものさ——、親一人娘一人で、淋しいとは言うものの、お吟に好い後継ぎさえ見つければ……）などと

考え乍ら、外の麗さに、瞳をトロリとさせていた。

『お父様、聞いていて下さるんですか』

『ホイ、聞いているともな。そりや一体何日のことさ』

『もう二月ばかり前の事。お父様が風邪から悪い熱をお病になつて、枕の上になかった時なのです。誰にも黙って、私はこッそり笹子の文珠様へお詣りに参りました。ええ、怖しいのを忘れて、夜更にあのお陣屋の側から山へかかりました。すると……』

『お吟——』定八は膝を改めて、『私が病氣中に、そんな苦勞をかけていたとは些つとも知らなかった、宥してくれ。そしてお前は、そんな夜更に駒木様のお陣屋から山へ登ろうとしたのかい』

『冷りとしたのは其の時でした。陣屋の裏山へつづいてあるあの高い黒塀を、妙な女が、一心に越えようとしている所を、チラと見て了つたのでございます——先でも悔ッとしたでしよう、凝と私を睨みました。けれど、私は頭巾を被つて居りましたし、先の女は銀杏笠に顔を隠して居りましたので、その凄目元は見ずに済みましたけれども……』

『……』研究は何にも言わずに娘の顔に眸を据、ゴクリと一つ喉を鳴らした。

『余り吃驚したので、暫く立ち竦んで居りますと、笠の女が、何方へお出なさいます——こう私に声をかけました。私は素直に答えました。文珠堂へお詣りに参ります——』

『一体その女は何者だ?』

『まア聞いて下さいまし。すると優しく、道案内をしてやろうと言うのです。尾いて行くと親切に、文珠様のお堂の前まで連れて行つてくれて、私の願掛けが済むと、その女が手を支いて、どうぞ先刻見たことは誰にも話してくれるな、と頼むので

す』『うーむ、すると、女の盗賊だな』

『いいえ何か深い訳があるのでしよう。聞いても仔細を話しませんが、その女の言うのには、自分は江戸の女師匠で、何うかして三絃の一流を編み出したため、また寒声を練るために、この山の文珠堂にお籠りして居る者で、決して怪しい者ではない、そのうちには里へも流しに出る——と、こう言い乍ら三味線を取つて、低い水調子に弾きだしました。その音色やら撥さばきの好かつたこと、ほんとに思い出してもソツとする位でした』

『あ、解つた。では先刻店の前に立つた鳥追が、その時の女なのじゃないか』

『慥にそうでございます。ね、お父様、私は何だかあの女に、深い——苦勞があるんじゃないかと思われれます。今度来たら、刀の持主を教えてお上げなさいませ……』

『待てよ、お前は若い——』定八は腕を拱んで、娘に聞いた奇怪な話を、種々な空想の下に組み立てて居るらしい。臉の皮を剥ぐように、凝りと眼を開いて、

『言うなよ、誰にも——』強く念を押した。

『三絃で一流を編出した修業だと言う、その女の言葉は附けたりさ。現に、お陣屋の塀を乗り越えようとして居たというじゃないか。な、それだけで解っている。誰にもそんな事を喋舌らぬがいい、触らぬ神に祟り無し……』

『と言うとお父様のお考えは?』

『知れていらあな。御領主様の事を、大きな声じゃ言えないが、この御代崎一万石を御知行にしている駒木様のお陣屋ほど、何う考えても腑に落ちないものは無い。いろんな影があの山の周りに射すのは当り前さ。……』

お吟には、分つたような分らぬような言葉であつた。

恋の目、刃の目

西に聖天子あり東に名將軍あり。と謳われた家齊の治世も、その晩年は絢爛な江戸の腐敗を産んでしまった。いわゆる大御所様時代、錦絵そのままな華奢風俗を尚び、遊情に耽る上下の風潮は、お膝下ばかりでなく甲斐の盆地へまで流れていた。

その文政四年である。恰度三月の十三日。

杏畑や麦の穂に、午後の陽ざしが燦々として麗かな御代崎の町端れへ、一隊の荷駄が江戸から着いて衆目を惹いた。

荷物はすべて婚礼の調度であつた。釣台に山と積んだ呉服縮緬の渦巻、牡丹唐草の蔽衣をかけた鏡台や塗篋、金紋の長櫃、華麗な屏風の類など、その贅沢な調度が、陣屋の山へ静々と蛻つてゆく態に町の者はどんなに眼をそば歛てたことであろう。

『いよいよ御祝言もお近くなつたと見えますね』

立ち淀む者の噂が、こう一致していた。

『左様、あのお陣屋へも春が来ました——』詠嘆するように言う者もある。

『何しろ殿様のお陣屋は、ここ二三年、恰度氷室の様でしたからな』

『その辭、お金はうんと有るのだそうですね』

『御裕福なことは無類さ、禄高は一萬石に過ないけれど、あのお陣屋に伝わっている御先祖からの隠し金という物が有って、それが何十萬兩だか知らない竿金で埋まっているという事だ』

『その御身分の御領主様が、陣屋の外へ一足も出た事がなく、領内の者が誰一人として、殿様のお姿を知らないというのは妙

じゃないか』

『そりや誰でも不思議に思っているが、今度こそお光様へ、京都の堂上方から好い御養子が来るのだから、そしたら殿様もお嬢様も、稀にはお陣屋の外へ明るい姿をお見せなさるだろう』

『序のことに、あの憎面の家老の司馬大学奴が、お役替にでもなれば可いが』叱ッ……誰か言つた。

その時、側に居合する者が、慌てて袖を引き合うと、噂々に群つていた町の者は、水を撒かれたように散々に隠れ去つた。

と——その中から真つ直ぐに一人旅の男が向うへ行く。

この地方に好く見かける御岳行人であらう。荒編の道者笠にスッペリした白衣をつけ、同じ白の手甲脚絆、春く午後の日を背に浴びて、ビタビタと歩んで行つたが、聽て研定の店へスツと入つて、

『ゆるせ』と穏かな含み声、上り框へ腰を下した。

『おお、これは』と、奥の暖簾口から姿を現した定八、敷物を俯めて慇懃な客あしらい。

『今朝にもお見えになるかと思つて居りました』

『約束の十三日、受取りに参つたのであるが、先日頼んだ研ぎは出来上つて居ろうか』

『はい、雑な刀とは違ひまして、減多にない京の国重、この親爺も研映えがふいますので、意外に早く上りました。お氣に召すか何うか、兎もあれお検め下さいまし』

正面の刀掛から取外してきたのは、凡の作りや脇差と違つて、只見れば杖とも見える一本の白木鞘。持つてみて初めてドッシリと重目を感じる。

『重畳。では一見いたします』

『どうぞ——』と、容を正して研定が差出すと、端然としてそれを左に受けた御岳行人、横一文字に持つて徐ろに懷紙を口に

啞え、右手を柄にかけて、ふッつり、鯉口を切った。

引き抜いてみれば研澄まされた無反の国重、藍を湛えた水かのように面を映し、微かに手を動かす時は、燦として妖麗な刃紋の光波がギラギラと錠子へ繞れてゆく。直刃の品位は高し、剣としての相は可し、まさに稀世の銘刀と一目に知られる。

『……………』御岳の若人は、美しき剣の錠に見惚れて飽くことを知らなかった。暫くは無言の気味合——。研究も腰を屈めて凝と相手の顔色を見る。

見て驚いたのは此の若人の相貌だ。何という端麗な眉目！
氣凜の高い唇元！これは只の御岳籠りではない、思い合せれば言葉遣いや物腰にもどこか床しい節がある。

（だが、一つ気に食わない所がある）と研究が老婆心を起した。と言うのは、今、刃渡りに目を通しているその眸子である。その眸子の底に、脈々たる一種の凄氣と言わんよりは、寧ろ殺念のあることを見遁せなかった。

『お茶を一つお召り下さいませ……………』

何の空氣も感じないで、そこへお吟が茶道具を運んできた。乾山焼の茶碗を揃えて、優雅かに玉露を注いで出したけれど、若人の眼は地鉄の精靈に吸いつかれていた。

『どうぞ……………』怖々と、一度すすめた時に、何うしたのか、お吟の耳の根から頬の辺がボツと赧くなった。薄紙の雪洞へ灯が点つたような色である。それ程、心臓も何かに動悸を衝つたらしい。——けれど何故だかお吟にも分らない。只その笠の下を覗いた時に、ハッと羞恥しい氣に狼狽えて、吾にもあらぬ袂の端が、茶碗の玉露を滾してしまつた。

『あれ……………』と、お吟が立ちかけると、

『危い！』手を出して、刀を除けさせたのは研究の親心。だが、その途端には、水田郷国重の一刀、ピチンと白鞘に納

まつて、御岳行人の左の手に持たれて居た。

『忝ない、見事に砥ぎ上りました』満足な笑みを湛えて、お吟の注ぎ直した茶を美味そうに喫つた。

『逸作の国重だけに、お氣に召したと仰有られる迄は、私も心配でございました。どうぞ悪い所をお氣着きでございましたら、遠慮なくお聞かせなされて下さいまし』

『いや、拭から鐔の手入まで申し分はない。これなら護身の刀として持心地も又一段……………併し定八殿』

と少し真味の声になつて、

『鍛冶は護剣を鍛えるのが名人の心得と承るが、時により、世の場合に依つては、破邪の剣、降魔の太刀も必要と申すもの、この国重も斬るとなつたら、充分斬れるでござろうの』

『斬れますなあ——』と研究、好きな道だけにツイ釣り込まれて『戦場の乱打などなら知らぬこと、平場の斬合としてみれば、幾ら腕ッ限り斬つた所で、折れるの鈍るのという刀ではございません』

『うむ、そうなくては頼母しくない』

『ですが旦那様……………今の懦弱な世の中では、それ迄の刀が要る事もございませぬので、自然私共の稼業なども位が下つて参ります』

『いや御亭主、こういう世にこそ真の銘刀が要るのだ。嫌な世の中ではないか、町人共の嬌奢はまだしも、武家旗本は申すに及ばず、大小名の家中に至るまで、みな財宝の餓鬼同様、巧言を以て君に仕え、己れの榮華以外には義もなければ節もない輩ばかり』

『御尤でございます。現にここのお陣屋などにも、随分悪い噂がありましてな、御陣代の司馬大学という方が、その財宝の餓鬼同様といった惡諺い質で……………』と言いかけて定八は急に黙つ

た。飛んでもない口をこらしたと後悔したのであらう、ふいと話を外へ紛らわしてしまふ。御岳籠りの若人も、深くそれを訊ねもせず、間もなく腰を上げて悠々と研定の軒から出て行つた。

と——殆ど入れ違ひに。

ばらばらッとし店へ雪崩て来たのは七八人の陣屋の手先。足固めも厳しく揃っている。

奥へ入ったばかりの研定が、はッと胸を衝たれていると、羽織の裾を前袂みにした柘植半蔵という陣代の腹心。上り框へ横柄な片胡坐を掻いて、

『おい、定八!』

これ見よがしの十手を逆握りにジロリと奥を睨みながら嗚鳴つた。

『火急のお調べだ! 店の研物預り帳を一寸ここへ出してくれ』

破邪顕正の剣がある

何を検めるのか、柘植半蔵、否応なく、研定に出させた覚帳をべらべらッとし鋭い眼を忙しく辿らせて行つたが、不意に、五六枚目の一行をトンと指で突いて、

『これだ!』と、手先の者へ突き向けた。

後の者が寄り集つてその指尖の文字をチラと覗いてみると、

『初代水田之作。拵無直刃二尺七寸五分。御依頼小枝角太郎様』

『たッた今白鞘の一腰を受け取って立ち去った御岳籠りこそ、この角太郎に相違ない。それッ、見失わぬうちに追いかける』

ッ

立ち上った柘植半蔵、礼も言わずに覚帳を店頭に掲げ投げ、六人の手先を引き連れ、疾風の如く其店から馳け出した。

何時か、大きな春の月がぼっかりと、笹子峠の肩あたりに、臙な光を滲ませていた。陣屋の山の白壁も夜霞に捺すられて町にはチラチラと宵の灯が瞬きはじめる。

新町筋は分けても明るい狭斜の巷、桜も三分の咲きを見せて、水引暖簾の家並に、脂粉の夜風が温く流れ空さえポツと赤るんで見えた。

その人混みを泳ぎ抜けて、何者かを尾け慕つてゆく手先の影。つ——と横道へ反れたなと思うと、路次の蔭や天水桶の暗がりにベタベタと身を潜める。

とも知るや知らずや、黄昏近くに研定の店を出た御岳行人、無反の白鞘を白衣の腰にりゅうと落して絃歌を外の道者笠、戸閉した町の暗がりへ春の夜寒をビタビタと踏みしめて来る。

得たり! と思った柘植半蔵、穀問屋の蔭からソツと片手を振ると、鼠走りにスススと後を狙った手先の一人が、バラリと解した捕縄の早手。

『ええッ!』と虚空へ一条の輪を描いた。

放たれた縄の一端、蛇かと蜿って、御岳行人の影へ巻き付いたであらうと思われたに、こは如何に一本捕の早縄は空しく風を切ったばかりで、目ざす人影は一足跳び五六間先——ヒラリと躍つたが又同じ足どりで悠々と歩いている。

『野郎、勘づいて居やがるんだ! それ打ち込めッ』

半蔵が息り立つと同時に、氷雨の如く走つた十手の閃々、前後から一斉に、

『小枝角太郎、御用だッ』とばかり、乱手を食らわして打ち込むと、ドツと肩を越して筋斗打つたのが一人、脾腹を蹴られて

ふん反ったのが一人、後は電瞬の早技に振り飛ばされて、御岳行人の小枝角太郎、ビタ——と土蔵の白壁を脊にして立った。

『理不尽な奴！』汝等に縄目をかけられる覚えはない、無作法なまねを致すと容捨はならぬぞ。道者笠の裡から凜然たる声が衝って響く。

『だまれッ』呶鳴ったのは半蔵である。

『予て殿より、蟄居の命をうけている苦の小枝角太郎、何故あつて江戸詰の禁足を破つてこれへ参つた。御陣代の吩咐じゃ、神妙に縄にかかれ』

『控えろ下郎！』如何にも小枝角太郎は、江戸屋敷詰の役を剝がれて、蟄居禁足の命をうけたに相違ないが、それは皆殿様の預り知らぬこと。一に奸悪司馬大学を初めお家を呪う藩臣共の策謀ではないか』

『策謀とは何だ！』いやさ御代崎一萬石の御陣代を指して奸悪とは何だ！ うぬ、それだけでも縄にかける罪科は充分』

『やわか汝等の毒手にかかろうか。小枝角太郎には破邪顯正の剣がある。併し——お傷ましいのは大殿駒木大内記様……』ホロリと声を潤ませたが、直ぐに屹と睨を映して、

『殿、御病身を倅にして、司馬大学が好き勝手な僭上沙汰。それは未しも、良臣を追ひ邪党を作り、主家の財宝を乗っ取らんとする悪謀隠れなき所じゃ。せめて一箇の義人なければ、殿様や一人の姫様——お傷ましくも皆悪人ばらの餌と成ろう』

『ははは、馬鹿野郎ッ』柘植半蔵、つばを飛ばして嘲笑の齒を剝た。『様を離れて血迷つた瘦浪人めが、何を寝ぼけて居やがるんだ、文句があるなら御陣代の前へ出て吐かせ』

『推参なる御用呼ばわり、汝等に旧臣小枝角太郎を召捕る権力は無い』

『無いもくそも有るものか。ええッ、面倒くせえ、袋叩きにし

て引つ立てろ！』

喚くや否、隙を見ていた捕手の者が、十手を揮つて角太郎の小手をビシッとして打つて蒐つた。途端に、小枝角太郎の手から抜き払われた白鞘の水田国重、颯々と、気合をうけて横薙ぎの光流を闇に見せた。

何で堪ろう——わッという声も無かった。ムラムラと立つた血の香の下に、ドーンと輪斬りになって斃れる胴体。

『おのれッ』『御用！』凄まじい乱闘の渦巻も、皎刀国重の一揮二揮、忽ちバタバタと斬り伏せられて、もう飛びついてくる餓武者もない。

『すばらしい！……』と呟いて、角太郎は土蔵の蔭に立ちながら、鯨れた国重の刃渡りを蹟めた。『……好く斬れる！』この刃味なら司馬大学を初めお家に巢食う小邪党の奴ばら、片っ端から斬つて斬つて斬り巻くとも血に飽まい……』

無気味な恋猫の音がする。何家かの塀の忍び返しに暈をかぶつた春月の仄明り……

凝と、月へ透かした切っ尖から、ポトと滴る血汐の糸——と、その足許へ何時の間にか這い寄つて来た柘植半蔵。

息を殺して、ぬッと太い腕を伸ばしたかと思うと、

『うむッ！』と叫んで、角太郎の足を掴むや否や、肩に掛けて押し乍ら身を起した。併し、相手はさして驚きもせず、ボンと頸を蹴払つて、半蔵が踴々となつた所を隙かさずに、

『鼠賊めッ！』

袈裟斬けに只一刀！ 片手打ちの斬り捨てをくれて、ヒラリと小路の闇へ姿を隠してしまつた。

土蔵の白壁へ牡丹のような血を打つて、ウーム！ と横仆れになった柘植半蔵、のた打ちながらも懸命に口に咥えた呼笛の喘ぎ——ビリビリビリ……と凄惨な音を頼ませて締切れる。

急を知って、程もあらず殺到した提灯の数、十手刺叉、番屋六尺、陣代屋敷の侍も交り長蛇になって新町小路へ疾走した。

『あれだッ、右へ反れた』

『遁すな、抜裏へ手を廻せ、抜裏へ——』喚き合つた人数、茶屋町の角までは、慥に先へ行く白い影が飛鳥のように見えたのに、そこ迄来るとその影は、忽然と消えて見当らず、右往左往に狼狽え、ただ罵り合う声ばかりした。

すると、小溝の流れに沿って、紅燈の明りに、桃色の蕾の浮き立つ桜並木の片側町を、シンとさせて流して来る園八節の三味の音締……

陣代屋敷の使者

『待てッ、門附！』

呼び止められた女太夫は、吃驚して撥の手を止めた。見れば陣屋の侍や六尺棒を掻い込んだ番太郎などが、物々しくも女一人を取り巻いて凄じい血相。——併し、

『はい、何か御用でございますか』

と素直に答えた鳥追は、かかる間にも客商売の艶めかしい媚嬌を忘れていない。

『む、お前はこの春先から、町へ来ている江戸の流しだな』

『はい。毎度御鼻屑をうけて居ります、お妻と申す旅芸人でござります』

『左様なことを改めて聞くのではない。今向うから参つたようだが、何処かそこの横丁か物蔭で、白衣を着けた御岳行人の

姿を見かけなかったかどうかじゃ』

『あ！ その御岳籠りなら——』

『知って居るか！』

『たつた今、私が旅籠を出て来ると、ドンと胸へ打つかつて摺れ違つて参りました』

『やつ、では向うの横丁を？』

『いいえ、この川尻の水車小屋、慥にあの辺へ隠れ込んだ様子です、早く手をお廻しなさいませ』

『しめたッ』とばかり、手懸りを聞くが早いか一閃に星をつけて、女の言つた町端れの水車小屋を取巻いて見た。けれど、そこには悠長な水車の音と、番人小屋の灯が点つて居ただけで、似寄りの人影さえ見当らなかった。

旅籠調べや神社の床下探しまでやり抜いた揚句、得たものは疲労と愚弄された憤怒だけで、遂にそれから、十日と過ぎ廿日を経ても、小枝角太郎の行方は杳として知れない儘である。併し、陣代屋敷のきびしい詮議の手は緩まず、高札場や町の辻に彼の端麗な面貌が、極罪人の人相書となつて貼り附けられた。

その頃から——

人知れぬ悩みを胸に持つたのは、研定の娘お吟であつた。お七番の鹿の子はなく、帯上げの緋は春らしく燃えていても、お吟の眸は生氣がなく露んでいる。

（何うしてあんな好いお方が、お尋ね者同様になつて居るのかしら？ 此家へ逃げてお出になれば、命にかけても匿うて上げるものを……）

今も店に坐つて、現にそんな事を考えて居ると、仲間を連れ一人の武家が、鷹揚に店へ入つて来た。

『あ、お陣屋の用人様——』と、お吟は魔の影に襲われたように奥へ逃げ込んだ。それを定八が叱つて、入れ代りに店へ出て

来意を訊くと、駒木家の用人山名典六、威儀を厳つく改めてこう言うのである。

『既に、御領内にも噂のある通り、いよいよ京の堂上家より御養子がお越しある事に決った。吉日は四月上旬、お陣屋では今何かの準備に目を廻している最中——』と、ここで茶に喉を潤おしてから、膝の扇子へ両手を乗せた。『時に、其方へもお上から一つの御用が下った。他でもないが、お姫様のお護り刀、その手入を申し付けられる。じゃが、何せい伝家の御宝刀、お陣屋の外へ持ち出すことは能わぬに依つて、御家老司馬大学様のお屋敷に参つて研ぎ上げるようとの仰せ。直ぐ身共と同道して貰いたい。』

『畏まりました』研定はこう答えるより他に道がなかった。

奥へ入つて、羽織袴を持出してしていると、お吟は、簞笥へ顔を当てて、シク、シク……と泣いていた。

『何を泣いている？……子供ではあるまいし、私が出て行く時には、袴の紐でも結んでくれるものじゃ。』

『お父様……』お吟は袂を持ったまま、父親の足元へ泣き崩れて、『私……私……』と、涙で顔を濡らして、『……』

『何を言っているんだ』定八は袴の腰を当てながら故意とらしく笑い消した。

『忌の応のと言え先様ではない。なアに、短刀の一本位は、みっしり二日二晩もかれば研げる。裏の小母さんにでも泊りに来て貰つてな、大人しく留守をして居てくん』

『……』

『でも……何ですか行き先が、妙に気懸りでありませんもの』

『……』

『はははは、其んな事を言つて居たひには、刃物弄りの商売ができるものか。ましてや親一人子一人で、こうして榮々暮して……』

いる私の家だ、お前一人を淋しく置いて、何時まで永く居るものか、屹度二三日でお暇を戴いてくるから……な、待つて居るのだぞ』迎えの籠に乗り、仲間研の道具を持たせて定八は、用人山名典六と共に、陣代屋敷へ出向いて来た。そして奥まつた一室に、二刻あまりも待たされた後、ここを仕事場という密室へ移された。

出入口へピンと錠を下された時に、研定は初めて危惧の胸騒ぎを起した。変だな、と気付いた時はもう遅い。明日、その翌日になつても、護り刀を研がせるなどという風は微塵もなく、甲州研定はここにまんまと押し込まれて了つたのである。

恋と慾との司馬大学

線の太い角顔だが、眉の濃さと隆でた鼻柱は、如何に此の男が遠謀に富み聡明であるかを象徴している。更にその眼の鋭さも、色の浅黒い相好に調和して一種の威光を持っている。

その男とは——御代崎一万石の家老格、陣代様と称せられている司馬大学だ。一万石は旗本の最高、大名の末席であるが、その内外を切廻す家老格にして見れば、相応の年配でなければならぬに、大学はまだ朱唇白眼の男盛り、三十四五歳、逞しい威丈夫である。

『ふむ……まだ分らぬか』

ぞっくりした黒縮緬の片腕を脇息に凭せ、眼を落したの一枚の図面、主家駒木大内記のお陣屋の山の図面である。

殿様御住居、御書院、御寝所、書庫、御息女の居間——などと一々細密な符牒を書いてあり、更に庭園、泉水、米蔵、驚く

べき根氣と細筆が展開されている。

『無益だのこれも……』大学は側の盃を取って口を濡し、更に其れを用人の山名典六に酌した。席には、まだ八九人の侍がいた。何れも司馬大学の腹心——と言えば駒木一万石の家臣は、仲間の端に至るまで大学の味方で、真の殿たり主君たりする大内記その人は、有って無きが如く、痼疾の病体と言われて姿に接した者はない。

『かような絵図面ばかりを、幾ら細かに引いてみた所で、何時迄も肝腎な秘庫の口が見つからぬでは無駄なことだ。もう止めろ！』

大学の肩間に燐のような不機嫌が燃えた。

『そんな探し方では手緩い話。考えても見るがいい、五十年の生涯とすれば、後の米耀榮華は十四五年、ぐずぐずして居て間に合ひはせぬ。よしよし聽て近いうちに、この大学自身が秘宝の有所を掴んでみせる』

『併し御陣代——』典六は一膝ゆすって、

『凶面を写したり草刈の小者などを入れて、秘庫の口を探すような事も、至って迂遠かも知れませぬが、近いうちには、京都より御養子の興入も有り、それが明敏なお方でも有ったひには、もう滅多にお陣屋内の家探しもできませぬ故、で今の内に出来るだけの手廻しを……』

『典六……』と大学は苦っぽく冷笑して、

『では其方までが、御息女へ来る養子を、真氣になってお陣屋の第二のお上と仰ぐ心算か』

『甚だ残念に存じますが、どうも御興入になって見れば、是非ない次第かと心得ます』

『馬鹿なッ——』と——仰有るのは？』

『あのお麗しい御息女は、この大学が密かに思っている恋人

だ。しかも、駒木家の先祖より、陣屋の山の何処かに深く埋藏されている、何百貫の甲州金の有り場所も、あの御息女だけが知っている筈——。恋と慾の両道を導き給う菩薩をば、おめおめ貧乏公卿の倅などに、自由に任せて可いものか』

『それは、他人事ながら此の典六も、齒がゆく思っている所でごさるが、既に御結納も済み華燭のお日取まで決った以上、今更取り返しのつかぬ御失策』

『失策じゃ……ふん、そんなどじを致す大学ではない。計略はこれで着々と成就しているのだ。ではもう拙者の心中を打ち明けても可からう。斯うだ！一同もずっと前へ進め！』

『はっ……』何を話されるのかと、怖るおそる膝行出した腹心の者へ、この夜大学が何んな怖るべき秘密を打ち明けたか？

それは同座して耳を寄せた者以外、知るよしもないのである。兎に角、それは余程な大陰謀であつたらしい。悪智に長けた余の者も、追に聞き終つた時の顔色は動じて居た。思わず、ふ

ッ、と、太い息が出る。

『では研定をお呼びになったのも、その御深慮でございましたか』

『問う迄もない事。何せいその日は人数が要る。事に当って大事なもの刀、斬れるを專一に荒研をかけさせて置く所存じゃ。屋敷にある数だけの刀を、今夜からセッセと研がせて置くがい

い』

『承知いたしました。そう伺えば吾々も一段の励み、では直ぐにも——』と、典六は座にいる侍を連れて、奥蔵の長櫃から、

四五十本の大刀を束にして担ぎ出し、それを研定の座敷半へ持ち込んだ。で——呆れる前にぬつと仁王立。

『これが我家の護り刀だ！定八、今夜から五日迄に荒研でい

いからズバズバと斬れるように研いで置け』

陣屋の御息女の祝刀が、この殺伐な刀と言われて、研定は只呆然と迷ってしまった。

(諸は、世間で噂のある通り、陣代の司馬大学が陰謀と覚える……)と、思えば、自分は先祖から大内記様の恩顧をうけている町人、加担は出来ないと思つて決めた。

『お断り申します。甲州研定、老ぼれでは無いですが、御領主様の御婚礼に、滅多斬りをやる荒研かけなど出来ません。はい、畏れ多いいます。それに私には、お吟という一人娘が、淋しく留守を待つて居りますから、これで御免を蒙ります』

立とうとすると山名典六。眼を血走らして、『待て!』と扉口に立ち塞がった。そしてジロリと他の者へも目配せし乍ら、『命が惜しくなければ帰るがいい。その娘に、二度と逢いたくない気なら忌だと吐かせ! さッ研定! 性根を据えて返辞をしろ』

折から外は妖麗な桜月夜、大願から泉水へかけて、紛々と散る花精の乱舞は、温い魔の息に吹かれて怪しくも晃かしい幻影を描いている。

恰度その時——魔の棲む陣代屋敷の黒塀に沿って、女太夫江戸のお妻が、何気なく粋な音締を流して来た……

お七髷へ目付の眼差

クルクルと、落花を巻いたつむじ風に、流しのお妻は、笠や帯や抱ぐ三味線まで、花びらの小紋に染められて、しばしが間、そこに息づまってしまったが、吹き煽らるる棲の前を、撥の手に抑さえたまま、

『オオひどい……』

と、婀娜な姿を花明りの闇に立ち迷わせた。

長い長い黒塀に沿って、一頻りの、花旋風の渦が吹き退いてゆくと、あとは又、春宵の温い空気に返って、散り減ったとも見えぬ桜の梢に、蒔絵師の指で研がれたような、銀いぶしの月がみえる。

『——花のあらし——』

お妻は、何かの唄を思い合せて、こう独り語をもらした。そして、三味線を持ち直し、キリリッと、でんじんの捻を鳴らしながら、塀のかげを二足三足——

しずかに歩きかけた時である。

突然、屋敷の中から、何やら騒がしい物音が流れてきた。

お妻はビタリと身を寄せて、そこに耳をつけ澄ました。——長廊下を馳ける大勢の足音、それが消えると、やがて又奥まった所から、威猛高な罵り声がひびいてくる。

併し、広い庭をへだてているので、それが何の騒ぎやら、想像もつかず、聞きとれもしないでいるうちに、

『おや?』

かれは又一方の暗がり、不思議な人影を見たのである。素ばやく、塀の根もとに身を踞居ませてジッと眸をすましていると、そこに、人ありとも知らぬ若い女が、心を現にして、塀の周りを彷徨ってくる。

女は、あらぬ影を求める如く、行きつ戻りつしている様子

——お妻と同じように、屋敷の中の物音をもれきくと、吾にもあらぬ態であった。果ては、袂を顔にあてて、

『お父様——お父様——』

忍びやかに、そして力の願える声で、こう呼びながら、バタバタと草履の音をさせてきた。

『もし』

不意に呼ばれて、娘はハッと身を竦めた。そして自分の目の前に起った者が、流しの女の影と知るまで、胸を躍らした風である。

『は、はい……』それでも未だ、唇のわななくのが言葉尻に哀れげである。

『吃驚なすったのでございましょう』

銀杏笠のふちを上げて、仄かな春月に、ニッコリ笑ってみせたお妻は、

『わたしはこの間、お店頭へ寄りました、流しのお妻でございます。もしや——とお訊きするまでもなく、あなたは研定のお娘さん、どうして今頃こんな所を……失礼ですが取り乱した姿をして、歩いておいでなさいますか』

『オオ、お前様は……』

こう答えたのはお吟である。

お七鬚の鬢がほつれて、夜桜の花びらが絡んでいるさえ、何か憂わしげに見えるのに、帯あげの鹿の子が解けかけているのも、自分では気がつかない程、お吟の氣持が乱れていた。

『何か仔細のあるらしい御様子、一体、どうなすったのでございますか？』

温か味のある言葉にふれると、お吟は、張りつめていた胸の氷が、泪と湧いて出るように、

『お妻さん——』

思わず、その人の裾へ、縋りついて仆れかかった。

『わたしの父の研定が、この屋敷へ連れこまれたまま、今日でもう十日あまり、家へ戻って参りませぬ』

『ええ、この司馬大学のすむ、陣代屋敷へ？』

『は……い。ほかのお屋敷なら案じませぬが、大学様はあの通

り、腹の怖いお方でございます。……そ、それに父の定八は、一徹者でございますから、どんな間違ひになつたかも知れぬと思ひまして』

『オオ、それは無理のない心配ごと。そして』

『昨日も今日の夕方、人をやって訊かせました所、定八はもう屋敷には居らぬ、知らぬ存ぜぬというお答えばかり、……いつ帰して下さるとも仰言りませぬ』

『それで様子を見においでなさいましたか』

『先刻の物音も、どうやら父の身の上ではないかと……ツイ取り乱して了うのでございます。お妻さん！……わたしを不慰と思うて、どうぞ父に会わせて下さいまし』

『まあ、可憐しいお頼みごと。ほんとに、そういう事情なら、会わせてあげたいのは山々だけれど、司馬大学と流しの女とは、あまり身分が違うので、俄に話もできないじゃありませんか……』

お妻は有めるようにこう言つて、お吟の肩へ手をのせたが、又、ちよつと思案をして、

『だけれど、好うござんす。今が今という訳にもゆきません、私が、キッと手曳きをして、研定さんを救いだして上げましょう。ですからねお吟さん……今夜はお家へお帰りなさいませ、悪く騒いでお前さんまで、司馬大学に睨まれると、それこそ、どんな目にあうか知れませんか』

『はい。あ、ありがとう存じます……』

『さ、こんな所に泣いているのは、目を閉つて地獄の淵に、立っているのと同じですよ。あぶない話……早く帰って、いずれ私が便りをするまで、凝と、辛抱しておいでなさいませ』

姉のような優しみ含めて、お妻がお吟の手をとろうとするど、どこからともなく、ボツと黄色い光がそこへさしたので、